

團 琢 磨 と 隈 本 有 尚

石井正則 (元三井鉱山)

1 團 琢 磨 と 教 え 子 たち

團 琢 磨 は 明 治 初 期 に 岩 倉 欧 米 使 節 団 に 従 っ て 渡 米 し、ボ ス ト ン で、開 校 し て 1 0 年 ば か り の マ サ チ ュ ー セ ッ ツ 工 科 大 学 で 鉱 山 学 を 学 ん だ。約 7 年 間 の 米 国 留 学 を 終 え て 帰 国 し た 團 は、念 願 の 技 術 官 僚 (工 部 省) へ の 道 を ふ さ が れ て、大 阪 専 門 学 校 (後 に 大 阪 中 学 校 か ら 京 都 に 移 り、第 三 高 等 学 校) と 東 京 大 学 で 教 鞭 を と っ た 時 期 が あ っ た。東 京 大 学 で は 理 学 部 助 教 授 と し て 星 (天 文) 学 科 で 天 体 の 観 測 な ど も っ ぱ ら 実 験 を 担 当 し た。当 時 の 星 学 の 受 講 生 は 主 に 理 学 部 の う ち で 星 学 科 ・ 物 理 学 科 ・ 数 学 科 の 学 生 たち で あ っ た。こ の と き の 團 の 教 え 子 たち の 中 に は、星 学 科 の 隈 本 有 尚 の ほ か に、物 理 学 科 の 田 中 館 愛 橘、長 岡 半 太 郎、田 中 正 平、数 学 科 の 藤 沢 利 喜 太 郎、採 鉱 ・ 冶 金 学 科 の 野 呂 景 義、山 田 直 矢 な ど、後 の わ が 国 の ト ッ プ ク ラ ス の 学 者 や 産 業 界 で 活 躍 し た 人 たち が い る。彼 ら の 一 人 は 「 (若 い = 2 3 歳 の) 團 先 生 と は、う ち と け た 友 だ ち の よ う な 親 し い 雰 囲 気 の 中 で、天 体 観 測 の 製 図 を し た り し て い た 」 と 語 っ て い る。お そ ら く 團 の 米 国 留 学 時 代 の 体 験 な ど も 話 題 に な っ た と 思 わ れ る。

こ の と き の 教 え 子 たち の 中 で、と く に 團 と 田 中 館 愛 橘 と は 生 涯 を 通 し て 親 密 な 師 弟 関 係 が 続 き、團 は 田 中 館 の ロ ー マ 字 運 動 を 物 心 両 面 に わ た っ て 支 援 し、田 中 館 は 團 が 中 心 に な っ た 関 東 大 震 災 後 の 三 井 本 館 の 建 築 に 際 し て、耐 震 性 に つ い て 専 門 的 な 助 言 を し た り し て い る。ま た 山 田 直 矢 は、後 に 團 が 東 大 教 授 か ら ス カ ウ ト し て 三 井 鉱 山 に 転 身 し て、三 井 の 鉱 山 事 業 の 統 括 者 に な っ て い る。

星 学 科 の 学 生 は 隈 本 だ け で、彼 は 團 の 直 属 の 教 え 子 で あ り、し か も 久 留 米 出 身 な の で、福 岡 出 身 の 團 と は い わ ば 同 郷 と い う 濃 い 師 弟 関 係 で も あ っ た。

ち な み に 当 時 の 東 京 大 学 理 学 部 の 主 な 教 授 陣 は 次 の 通 り で あ っ た。

土 木 工 学 … W i n f i e l d ・ S ・ C h a p l i n

数学…菊池大麓^{だいりく}（理学部長）

採鉱・冶金学…Curt・A・Netto

機械工学…Sir・James・A・Ewing

物理学…山川健次郎

星学…Henry・M・Paul（助教授は團琢磨）

2 隈本有尚の生い立ちと東大学生時代

隈本は1860（万延元）年に久留米で生まれた。父は久留米藩士で、幼名は井上木六郎、生まれてすぐ隈本家を継いだ。隈本は1872（明治5）年に、久留米藩が設立した洋学校の好生館に入学したが、後に好生館は旧柳川藩の洋学校と合併して三潞^{みずま}県立中学校（所在地が宮本村なので宮本中学校とも呼ばれた）になった。同校の校長は幕末に久留米藩から米国に留学した経験のある柘植^{つげ}善吾で、ここで隈本は英人宣教師ジョージ・オーエンから英語で幾何学と地理を学んだ。同校は1874（明治7）年2月に起きた江藤新平らによる佐賀の乱の影響などで、生徒たちが離散して閉校になったので、隈本は翌明治8年に上京して、東京英語学校を経て東京開成学校の予科に入学した。

なお、1877（明治10）年4月に東京開成学校と東京医学校とが合併して東京大学が設立され、東京開成学校予科は東京大学予備門（後の第一高等学校）になった。

隈本と東京開成学校予科で同級生であった三宅雪嶺（後に評論家、雑誌「日本及日本人」主宰）は回想記の中で次のように述べている。

隈本氏は自分と同年で、同時に開成学校の予科に入学した。氏は寄宿舍で能弁をもって知られ、その演説は面白かった。天文学を修め、しきりに天文の演説をした。天文は人間に縁遠いようでも、星雲の渦巻くところを図をもって面白可笑しく説明した…。自分の入学したときは校長がおらず、浜尾新^{あらた}（後に東大総長、文相、東宮大夫などを歴任）が校長補として事務をとった。そのこ

ろの教員は外山（^{と やま まさ かず}正一、後に東大総長、文相などを歴任）、谷田部（矢田部良吉、後に東大教授、東京高師校長、東京博物館長などを歴任）、山川（健次郎、旧会津藩士、後に東大・京大・九大総長などを歴任）らを除いて、ことごとく外国人、中でも米国人宣教師が多かった。日本人でも教場では英語を使用するべきことになっていた。

後に田中館は『山川先生が授業で「^{ほ しん}戊辰戦争の会津籠城の際に、官軍が撃った砲弾が頭上^{さくれつ}で炸裂したときには、砲弾が飛んで来た方向に逃げたが、その理由は（物理的に）砲弾の飛ぶ速度と炸裂した後の破片の速度とを合成すると、反対方向の破片の方が速度が小さいので危険が少ないということだった」と解説したことに感心した』と語っている。

隈本は1877（明治10）年9月に東京大学理学部星（天文）学科に入学した。

創立時の東京大学は東京開成学校系の法・理・文の3学部と東京医学校系の医学部を併せた4学部で構成され、理学部は数学、物理、化学（理論・応用）、生物（動物・植物）、星学、工学（機械・土木）、地質学、採鉱冶金学の8学科で構成されていた。その中で数学・物理学・星学の3学科は共同授業になっていたので、隈本は田中館などとともに、1880（明治13）年7月に、お雇い外国人教師のメンデンホール（物理学、星学）が指導した富士山頂での重力測定にも参加している。

1881（明治14）年にメンデンホールがアメリカに帰国し、その後任として天文学者のポールが来日した。

そのころ團は大阪中学校の教師であったが、團と親交のあったフェノロサがポールをつれて大阪に来て、團の下宿に泊まったりしたことから、ポールも團と親しくなった。そのポールが、フランスに留学した寺尾寿（^{ひさし}星学）の後任として團を東京大学理学部助教授に

幹旋したのである。このとき團は「星学は専門ではない」といって、なかなか受けようとはしなかったが、ポールは「星学といっても、学内に設置されている天文台での星座の観測が中心なので問題はない」といって團を説得し、その上で理学部長の菊池大麓^{だいろく}の了解をとったので、團は大阪を離れて、1881（明治14）年10月に、理学部助教授（星学）として着任したのである。

このときの團との師弟関係が、後に隈本の修猷館^{しゅうゆうかん}中学初代館長への起用にも関係して来るのである。

3 隈本が修猷館初代館長に

隈本は1885（明治18）年9月、25歳のときに福岡県立中学修猷館の初代館長に就任した。

福岡県では1882（明治15）年5月に就任した県令（知事）^{きしら}岸良俊介（旧薩摩藩出身）と県議会とが激しく対立し、議会で予算案を否決された県令が、県内の中学校を全廃するという強行手段に出たのである。県内の少年たちが学問の道を閉ざされたことを憂慮した旧藩主の黒田長溥^{ながひろ}は、金子堅太郎に黒田家の寄付金で、旧福岡藩の藩校修猷館を再興するように命じた。当時、金子は太政官^{だいしょうかん}（現在の内閣）大書記官で、明治政府の最高指導者の伊藤博文の秘書官を兼ねていた。

そこで金子は文部省と折衝した上で岸良県令と協議した結果、1885（明治18）年5月30日に、黒田家から「修猷館復興願」が福岡県令を経て文部省に提出されて許可を得たのであった。

この「県立中学修猷館」では、とくに英語と数学とに重点がおかれたことが、数学と英語を得意にしていた隈本が初代館長に起用された第一の要因であったと思われる。そのほかにも、隈本が東大の学生時代から優秀ではあるが、蛮カラで剛直な人物と見られていたので、その腕力の強さも、若くして館長に抜擢されたもう一つの要因であったと考えられ、それらを総合して、星学科の恩師の寺尾と

團が、同郷の隈本を金子に推挙したものと思われる。

隈本の剛毅さと数学の学力をしめすエピソードとして、彼は学生時代に、当時数学の権威者といわれていた理学部長の菊池大麓と学問論争をしたり、1882（明治15）年7月5日に行われた東京帝国大学理科大学の卒業式では、理学部長の菊池大麓から授与された卒業証書を、その場で「人物の真価をこんな一枚の紙によって定めることができようか」といって破って捨てたりして話題を提供している。この卒業証書破棄事件によって、隈本には学士号が与えられなかったが、彼はそのまま大学に残って理学部星学教場補助（助手）を経て、理学部星学科准助教授兼大学予備門教諭に任じられている。当時の隈本の腕力（をともなつた指導力）を示す一つのエピソードがある。

1883（明治16）年10月に、東大と予備門の学生たちの大部分が、学位授与式（卒業式とは別の日に行われた）をボイコットして、集会を開き飲酒して気炎を上げて、ついには市街を行進して寄宿寮にもどったところ、夕食が準備されていなかったのもので、大暴れするという事件が起きた。大学側は事態を重く見て、彼ら学生146名を即刻退学処分にしたのである。その騒動の主な原因は、大学側が学生たちの監督指導のために、寄宿舎の周囲を板塀で囲み、柔道の猛者を住み込みの舎監にして、学生たちを力で押さえ込もうとしたのに対して、学生たちが「まるで監獄だ」と反発したためとされているが、理学部長の菊池の指導方法に対する不満もその一因であったという説もある。その事件の翌朝に、隈本は文学部長外山正一・理学部長菊池大麓・法学部長穂積陳重^{ほづみのおしげ}の連名による呼び出し状で、その対策会議への出席を求められた。この会議の結論として、隈本が事件の後始末を任せられたので、彼は学生たちと接触しながら復学するまでの間、内密に助教授たちとともに補習授業を実施したりした。翌年2月になって学生たち全員の復学が認められたが、

その際に学生たちは、隈本に感謝の気持ちを込めて貴重な洋書を2冊を贈っている。

ちなみに当時の学生たちの中には、粗野、粗暴の者も多く、風紀も乱れがちだったので、ただおとなしい人格者というだけでは、彼らを押さえて教育指導するのが困難な面もあったようである。

その一例として、東京大学予備門から第一高等学校になった当初でも、生徒たちの風紀は乱れ、無秩序・放縦の状態であったので、それを憂慮した文相ありのりの森有礼が、帝国大学の教授たちの中から、同校の校長に木下ひろし広次を起用した。木下は生徒たちに「将来の国家社会の指導者になるための自覚」を強く求めた上で「学生自身による自主」を提唱して、全寮制度の下での「学生の自治」と「籠城主義（世間の汚濁からの遮断）」によって、風紀と秩序の改善を図ったのである。ちなみに、第一高等学校の寮歌には「自治」という語が多く出て来るが、代表的な寮歌の一つの「春爛漫」にも次の歌詞がある。

「三、それ濁流に魚住まず 秀麗の地に健児あり 勤儉尚武の旗の色 自治共同の笛の声 白雲なびく向陵に 籠るも久し十餘年」。

金子・團・寺尾たち恩師の推薦によって修猷館の初代館長に就任した隈本は、その重責を果たすべく強力な指導力と統率力とを発揮して、質実剛健の校風の確立に努めたので、博学で教育熱心という尊敬の評価とともに、その厳格さから「コマゴトユウゾウ（細かいことをいう）先生」というあだ名をつけられている。

開校後に同校を視察した森文相は「今天下の模範中学は福岡の修猷館と岡山中学の2校のみ」と公表した。また修猷館のある卒業生は次のように述べている。

今日修猷館の名声があるのは、幾多のすぐれた館長、諸先生方のお力によることは勿論であります。隈本有尚先生は早期の館長として、自ら倫理を担当せられ、中等教育の基礎学ともいうべ

き英語、数学、物理・化学、地理・歴史などの教師に一流の先生方を招聘^{しょうへい}され、先生方が熱心に訓育に当たられ、生徒もまた大いに勉強したからであります。隈本先生がその基礎を作られたといっても溢美^{いつび}（ほめすぎ）ではないと考えます。

4 隈本と夏目漱石…小説「坊っちゃん」のモデル

隈本は東大卒業後も教員として星学科に残ったが、その一方でアルバイトに、東大予備門の予備校として設立された私塾成立学舎の講師を勤めた。この成立学舎に、1883（明治16）年9月に塩原金之助（後の夏目漱石）が入学したのである。漱石はここで隈本から数学・英語・万国史などを学び、その後に進学した東京大学予備門（後の第一高等学校）でも隈本の授業を受けたことから、隈本と漱石の師弟関係はその後長く続いたのである。そして漱石は隈本のエピソードなどを小説のヒントにしていたといわれ、例えば小説「坊っちゃん」（1906＝明治39年「ホトトギス」に発表）に出て来る豪快で腕力の強い数学教師の「山嵐」のモデルは隈本であるという説がある。漱石は「坊っちゃん」の中で「山嵐」について次のように書いている。

それからおれと同じ数学の教師に堀田というのがいた。これは^{たく}遅しい^{いがぐり}毬栗坊主で、（比）^{えいざん}叡山の悪僧という面構である。…おれはこの時からこの坊主に山嵐という渾名^{あだな}をつけてやった。

また漱石は教育論について、山嵐に職員会議で次のような演説をさせているが、隈本の教育思想がもとになっていたのかも知れない。

教育の精神は、単に学問を授けるばかりではない、高尚な、正直な、武士的な元気を鼓吹^{こすい}すると同時に、野卑^{やひ}な、軽躁^{けいそう}な、暴慢な悪風^{そうとう}を掃蕩するにあると思います。もし反動が恐ろしいの、騒動が大きくなるのと姑息^{こそく}な事をいった日には、この弊風はいつ矯正出来るか知れません。かかる弊風^{とぜつ}を杜絶するためにこそわれわれはこの学に職を奉じているので、これを見逃す位なら始めから

教師にならん方がいいと思います。

漱石の大学予備門の同期に正岡子規、南方熊楠^{みな かた くまくす}、山田美妙^{びみ ょう}などがいて、教師陣には隈本のほかに英語の高橋是清などもいた。子規は「墨汁一滴」の中で、隈本について次のように述べている。

しかし余（私）の最も困ったのは英語の科ではなく、数学の科であった。この時数学の先生は隈本先生であって、数学の時間には英語よりほかの語は使われぬという制規であった。数学の説明を英語でやる位のことは格別むづかしいことでもないのであるが、余にはそれが非常にむづかしい。つまり数学と英語の二つの敵を一時に引き受けたからたまらない。とうとう学年試験の結果幾何の点が足らないので落第した。

この子規の話に対して、隈本は「自分の幾何学で無闇^{むやみ}に落第した者がいたように早合点されるかも知れないが、総じて一科目において微力な者は、また常例として他の科目でも不覚をとる。正岡君などは例外である」と反論し、半ば擁護もしている。

隈本は修猷館館長から山口高等学校教頭、東京高等商業学校教授、長崎高等商業学校初代校長などを歴任して、1913（大正2）年2月、52歳で朝鮮総督府京城中学校校長を退職して教師生活を終えた。

隈本はその教師生活の中で、その古武士的な厳格さなどから、山口高等学校では、寄宿舍生徒が一部の教師や舎監に対する不満から暴発した事件の責任をとる形で退職し、長崎高等商業学校では、彼の倫理講義に反発した生徒たちの排斥運動によって退職に追いこまれたりもしているが、長崎高商事件では、隈本が去った後に、学生の一人が次のように述べている。

今になって、去った隈本校長追慕の念が、いつも話題の種になっている。先生の三年間にわたる道義的教育による精神的感化は実に大なるものがあったと自覚し、先生に対して、ほんとうにす

まなかったと思っている人が多いようである。

なお、これらの事件のことは、夏目漱石が隈本自身から直接聞いたり、資料を集めたりして、場所を松山中学に置き換えて、脚色もしてはいるが、小説「坊っちゃん」の中に、いくつかの事件として書かれている。

5 隈本有尚と占星術による予言

隈本は1903（明治36）年3月から翌年11月までの間、文部省から長崎高等商業学校設立準備のための調査を命じられて、欧米諸国に派遣された。この洋行では、隈本は公的目的のほかに、彼自身の目的として、以前から深い関心を寄せていた欧米の神秘学や西洋占星術などの研究があり、この旅行中に欧米諸国の神智学者や占星術家たち^{あね}に会って知識を^{あね}拡げて帰国した。その後^{あね}に隈本は、姉崎^{あね}正治^{あね}（東大教授、宗教学）らによる倫理研究会雑誌「^{あね}丁酉^{あね}」に「螺雲道人」のペンネームで、西洋占星術による国事などに関する予言を発表している。なお「丁酉」は「ひのと・とり」つまり明治30年で、倫理研究会が創立された年である。

隈本はその後、同誌に「天文による運勢予想術」を紹介したり、講演などで占星術による予言を発表したこと、わが国における西洋占星術の最初の紹介者とされているが、隈本自身は「占星術」という表現ではなく「考星学」と称している。

隈本の考星学に大きな影響を与えたとされるドイツの思想家で神智学者のルドルフ・シュタイナー（1861～1925）は占星術について次のように述べている。

真の占星術は、しかし、あくまで直観的な科学であり、これに携わろうとする者は、高度の超感覚的な認識能力を要請する必要がある。今日では、そうした認識能力を備えることができる人はきわめて少数である。しかも、それは人がしばしば直感と呼ぶ漠然とした予感や半ば幻のような夢物語ではなく、きわめて明確な、

数学的思考としか比較できない内的な感覚能力である。

注＊占星術（a s t r o l o g y）…バビロニア、ペルシア、インド、サラセン、中国などに始まり、中世まで行われた一種の占いで、天体とくに惑星の位置や運行によって人や国家の吉凶・運命を占った。近世以前の天文学の形態とされる。

＊神智学…人間には神秘的な霊智があって、これによって直接神を見ることができるとする宗教学。

隈本は考星学（占星術）によって、将来起きるであろう事件や事象について、次のような予言をしている。

＊第一次世界大戦について（「丁酉」大正3年10月号）ドイツの運命について

- ①衝突破産の兆候があり、ドイツ皇帝の事業は道半ばで挫折し、ドイツ連邦は四分五裂するであろう
- ②大正5年3月までに、ドイツ皇帝は退位または崩御するであろう
- ③大戦後にドイツは共和国になるような兆候がある
- ④戦争終結による平和の折衝は中立国のスイスではなく、フランスで行われるであろう。

これらの予言についての歴史的事実は、ドイツは大戦に敗れて、皇帝ヴィルヘルム二世は1918（大正7）年に退位し、オランダに亡命した後に心臓病で死亡、講和会議はパリのヴェルサイユ宮殿で行われ、ドイツ帝国はワイマール共和国になっている。

＊海軍航空機事故について（「廿世紀」大正4年3月号）

運輸交通に関して悲痛または重大な故障を見るであろう。警戒期は3月中旬または5月上旬になるであろう。

この予言に対して、起きた事件は、1915（大正4）年3月7日、海軍の飛行機が演習飛行中に海中に墜落して乗員3名が死亡している。

＊第二次世界大戦について（昭和8年、学士会定例午餐会での講演）

時局の認識は思想的側面、人権的側面、経済的側面の3方面からなされなければならない、また、日英の再接近が実現しなければ大厄災が将来するであろう。そして戦争気分がみなぎる可能性が最も濃厚なりとされるところの外患は、概して昭和16年の見当になる。おそらく同一の渦中にわが国も投じる羽目に臨むであろう。

＊最後の予言（「丁酉」昭和19年1月号、「経済面からする時局観」）

（戦後の日米の経済戦争にまで言及した上で、結びの言葉として）今次の大戦が過去から現代に至る物質文明の弊害に起因するものであるから、そういう見地で見ると、将来いずれの歳月にか、また再び三回目の大戦が起きないとは断言できないので、私を含めて皆こぞって人類のために今次大戦から一大教訓を学ぶところがなければならない。

この予言を掲載した雑誌は、隈本の没後に刊行されたが、すでに、1941（昭和16）年5月に、内務省は「擬暦掲載記事取締ニ関スル件」を発令して、占星術などによる予言の発表を禁止している。

7 九州帝国大学と隈本有本

1911（明治44）年に発表された「九州大学年表」によると、1899（明治32）年1月、修猷館長隈本有尚、福岡日日新聞に「九州大学と高等学校」を発表、福岡における大学設置運動の口火となる」（以後、熊本、長崎においても「九州大学」誘致運動）、同年11月、福岡県会、九州大学設置に関する建議を可決。

1901（明治34）年11月、菊池（大麓）文部大臣、県立福岡病院を視察、12月、（菊池）文相、第15帝国議会予算委員会において福岡医科大学の設立を明治35年度から開始する

ことを言明

1903（明治36）年3月、京都帝国大学福岡医科大学創設

1910（明治43）年12月、九州帝国大学創設

1911（明治44）年3月、九州帝国大学工科大学に土木工学、機械工学、電気工学、応用化学、採鉱学、冶金学の6学科を置き、9月から授業開始、4月、元東京帝国大学総長山川健次郎、九州帝国大学初代総長に就任

とある。隈本は学生時代に菊池と数学論争をしたり、理学部長の菊池から授与された卒業証書を菊池の面前で破ったりしたが、隈本教育者としての経歴や、1903（明治36）年には長崎高等商業学校創立のために海外視察旅行を命じたりしていることから、菊池は教育者としての隈本の人物・力量を認めていたようであり、明治34年の県立福岡病院の視察から京都帝国大学福岡医科大学の設置、そして明治43年の九州帝国大学の創立には隈本が大きく関わっていたことは事実のようである。

8 おわりに

團琢磨は後年、三井合名会社理事長、日本工業倶楽部理事長、日本経済聯盟会会長など兼ねて、文字通りわが国経済界のトップリーダーを務めたが、1932（昭和7）年3月5日に、東京日本橋の三井本館の玄関前で極右テロ団体の血盟団員によって暗殺されて73歳の生涯を閉じている。

一方、隈本有尚は1908（明治41）年10月に朝鮮総督府京城中学校校長を最後に教職から離れて、以後、占星術家（隈本によると考星学者）として活動したが、1943（昭和18）年11月26日に、84歳で永眠した。その告別式には多くの修猷館中学時代の教え子たちが参列したが、その中には、元総理の広田弘毅（戦後A級戦犯として処刑された）が最後まで直立して哀悼の意を捧げていたという。

本集録編集者注：「国立天文台アーカイブ室新聞」（中桐正夫）
http://prc.nao.ac.jp/prc_arc/arc_news/ の第361号と第840号に
團琢磨についての記事が書かれているので参照されたい。